

読書の習慣を — 新入生諸君へ —

図書館長 後藤泰二

新入生諸君、入学当初の緊張と戸惑いの時期が過ぎて、そろそろ落ち着きを取り戻した頃でしょうか。このあたりで少し、読書ということを考えてみて下さい。

昨秋、全国大学生協連合会がまとめた調査によりますと、大学生が最近1か月に購入した書籍は1人平均5冊（そのうち文庫本が3冊）、そして雑誌が4冊だそうです。何となく「文庫本と雑誌の大学生」というイメージが浮かびます。もちろん文庫本にもいい本があります。古典があります。雑誌にしても総合雑誌や文芸雑誌があります。しかし、昨今の若者の、テレビ漬け・活字ばなれといわれる状況から考えると、「うすい本と週刊誌の大学生」という印象をいなめないのも確かです。これはどうやら、最近の大学生が本を読む習慣や意欲を持たないことのあらわれであるように思われます。もちろん、大学生のすべてがそうだというわけではないでしょうが、この機会に新入生諸君に、読書の習慣を身につけるためのごく初歩的な方法の一つ二つ提案してみたいのです。

まず、いちど図書館に来て下さい。そして書架の間を歩いてみて下さい。1冊や2冊は読みたい本がきっとあるでしょう。そのまま、横の机に座って読んでもいいし、借り出すこともできます。一度に3冊まで11日間です。これは引き続き11日間、更新することができます。ですから最長3週間、およそ1週間に1冊の割合で借り出せるわけです。（夏休みなどの休暇中は一度に5冊です）

いま、この本をかりに岩波文庫としましょう。何も岩波文庫に限る必要はないのですが、古典を読むという意味でこの文庫本をあげました。週に1冊。もちろん内容によってはそう簡単に読み終わることはできないでしょうが、とにかくそういう具体的な目標をたててみて下さい。そしてそれを着実に実行して下さい。半年もたつと、週1冊という目標をたてたことなど忘れてしまうでしょう。それでいいのです。本を読むことの方はもう忘れないでしょうから。

読書はひとりで読み、ひとりで考えることを基礎としますが、ひとりで読んでいてもなかなか分らない本も沢山あります。そういう本は、数人で質問し説明し合いながら読んでゆくと、案外、理解できるものです。つまり、読書会や研究会をつくって読むわけです。グループの中に先輩がいるとなおいいでしょう。毎週何曜日、何時からどこで、次回は何頁まで、というふうに読んでゆきます。この方法も、落伍しないかぎり、読書の習慣をつける上で効果的です。

学内にも、すでにいくつか、そういう読書会があるようです。先生方が指導して下さいている会もあるようです。どうか進んで参加して下さい。

本を読む時間を最も多く与えられているのが大学生です。社会に出たら本を読む時間は激減します。ですから、レジャーのためのアルバイトなどなるべくやめて、いまのうちに本を読む習慣を身につけて下さい。 商学部教授（企業形態論・保険論）

新入生図書館利用案内

— 特に目録カードのひき方について —

今 永 義 純

卒業してゆく学生からよく次のようなことを聞くことがある。「自分は図書館というところは、自習室ぐらいに思っていた。4年生になって卒論の準備に取りかかって、よく図書館を利用するようになって初めて、図書館にはこんなに多くの図書があったのか、もう少し前から利用していたらと思うと残念でならない。」と。また、院生となって、書庫内を自由に探索できるようになって、また図書館アルバイトの学生が、「自分はアルバイトをして初めて、書庫というものがあって沢山の蔵書があることを知った。多分一般学生は、書庫にそれほど沢山の蔵書があるのを知らないのではなかろうか。」というようなことをよく聞くことがある。

そのたびに我々図書館側の利用者に対するPR不足を感じてきた。それに対する対応策もいろいろ講じてきた。しかし何とんでも図書館利用の第一歩は、図書館に足を運ぶことである。そして図書館員に積極的に尋ねることである。図書館員から名前を憶えられるようになったら、もうしめたものである。自然とコミュニケーションがスムーズにゆくようになり、諸君にとって図書館通いが楽しみになってくる。時には何を探そうという目的がなくても、そこに図書館があるから寄ってみる。書架の間をブラブラしていると、以外と興味のある図書が目につくことがある。

どうぞ図書館利用を学生生活の一部にして貰いたい。図書館は、皆さん全員の来館を心よりお待ち

ちしております。

ここでは紙面の関係上、莫大な蔵書の中から、自分の目的の図書を探し出す道具となる、目録カードのひき方について説明しておく。カードのひき方に慣れることによって、本館にある40万冊近い蔵書が自分のものとなる。

(1) 目録カード

本学図書館には、和書、洋書の目録カードが別々になっていて、それぞれ、①著者名目録、②書名目録、③分類目録の3種類がある。著者、書名、主題(内容)もわかっているような特定の図書を探す場合は、著者名目録、書名目録いずれを使用してもいいわけだが、それぞれ次のような特徴があるので、使用を使い分けることが大切である。

目録は、図書の内容(主題)を利用者に案内する役目をもっている。

次のような時にそれぞれの目録を使用する。

著者名がわかっている場合 → 著者名目録

書名がわかっている場合 → 書名目録

主題(内容)がわかっている場合 → 分類目録

以下和書の目録を例にとって説明する。

1) 著者名目録

著者名は知っているが、書名を記憶していない場合、又は特定の著者の著作を探す場合はこの目

録を利用する。勿論、著者、書名、主題(内容)も知っていて所蔵の有無を調べる場合も利用する。カードは、著者名の読みをヘボン式のローマ字に直して、そのアルファベット順にファイルされている。同じ著者の中は、書名のアルファベット順になっている。例えば、川端康成は、Kawabata, Yasunari となっている。又、翻訳ものは、原著者の原綴りによっている。ウィリアム・シェークスピアは、Shakespeare, William となる。

2) 書名目録

書名は知っているが、著者名を記憶していない場合、また著者名、書名、主題ともわかっている場合にも利用する。書名の読みを、ヘボン式のローマ字に直し、その字順配列となっている。同じ書名の中では、著者のローマ字綴りのアルファベット順となっている。「西洋哲学史」は、Seiyotetsugakushi となっている。「西洋史研究」は、Seiyoshi kenkyu となり、配列の順序は、書名全部の字順を配列の単位としているので、「西洋史研究」の方が先にくる。また、外国の固有名詞も、原則として周知され、原語に近いものは原綴りでその他はローマナイズとなっている。

3) 分類目録

著者、書名もわすれたが、その図書の主題(内容)がわかっている場合、もしくは特定の主題についてそれに関するどんな図書があるかを調べる場合に利用する。カードは、日本十進分類法(利

用案内の24頁以下に主要なものを載せている。)によって内容別に、系統的に分類され、その分類番号順に配列されている。この分類目録でひくには、目録カードケースの上に置いてある日本十進分類法の体系をよく熟知したうでないとひけない。

(2) 日本十進分類法の体系

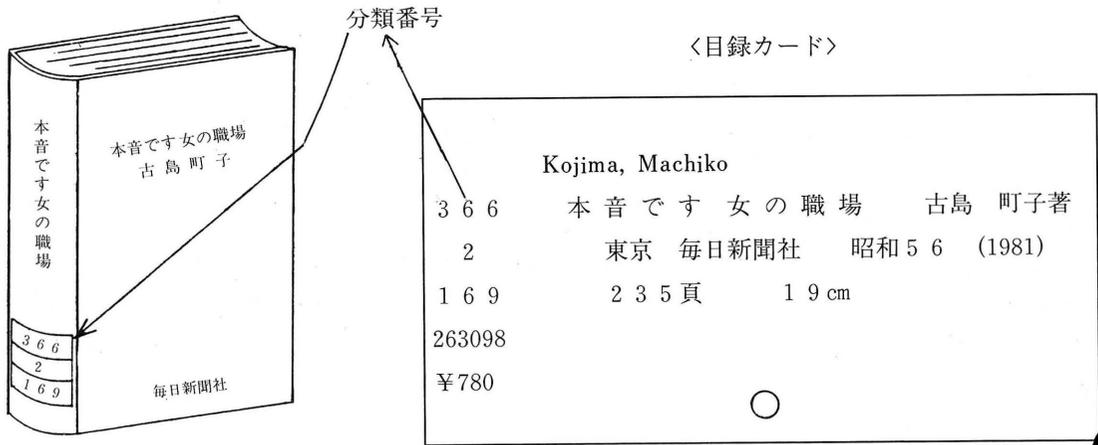
同じ主題の図書、あるいは主題相互間に緊密な関係を持っている主題の図書を、同一書架の上に集めることにより、利用者は、同じ主題に関するものが1ヶ所にあることを望む、という要求を満たすものになる。型の大小によって集めたり、また受入順に従って並べたりするより、学問的であり、理論的であるといえ、日本において大方の図書館が採用している。一般に用いられる標準分類表を用いると、他の図書館を利用する場合にも効果がある。

このように図書を主題によって分類し、一定の基準によって配列するのであるから、主題を集めて一つの順序に配列した体系表が必要になる。これが分類表で、我が国では和書については、日本十進分類法を用いており、本館においてもこれの6版を採用している。

この日本十進分類法は、知識を総記、哲学、歴史、社会科学、自然科学、工学、産業、芸術、語学、文学の10区分に大別している。さらに各区分を10区分、それをまた10区分するというように十進法で展開している。

【日本十進分類法大系】





(3) 雑誌目録

どの雑誌が、何巻・何号・何年から図書館に所蔵しているか、ということ調べる場合は、各開架閲覧室に備付（3階目録ケースの上にも置いてある。）の冊子体目録「西南学院大学雑誌目録」（1983年5月末現在）を見て下さい。雑誌の目録は、この冊子体目録だけである。

諸君が、新聞や紹介などで読みたいな、と思っ
た図書や雑誌論文があった場合それぞれ次のよう

な事項（書誌事項という。）を必ずメモする習慣を
つけて下さい。

図書：著者、書名、版表示、出版社、出版年
雑誌論文：著者、論文名、収録誌名、巻・号・
年、頁

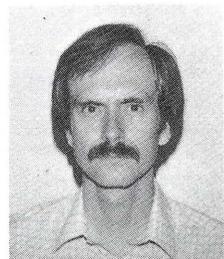
これらの書誌事項が不備だったり、間違ってい
ると、せっかくの資料も探せなかったり、探すの
に時間がかかったりします。

(情報サービス課長)



留学生が見た西南学院大学図書館

“My Impression About the Seinan Gakuin University Library”



Ernest E. Allen

From my vantage point as an exchange student from America, the library at Seinan Gakuin University would appear to fulfill what I view to be the necessary elements of a good university library: books and reference materials sufficient to cover the various disciplines taught at Seinan, plus a very useful U. N. Depository;

a large physical structure in good repair, having adequate heating/cooling; study/reading areas equipped with comfortable desks and chairs; and a knowledgeable staff with a desire to help students. However, there are some items that would provide the exchange student community with a library that could serve them more fully.

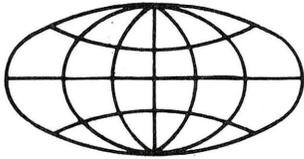
There seem to be a great many signs and notices posted on doors, walls, and catalogs that are undoubtedly important and informative; but, they are written only in Japanese and are, therefore, unreadable for foreign students. The addition of even the barest English translation would help us to use the library better, as well as not break any of the rules.

Although the library houses many, many books in English, the vast majority reside in the "closed stack" or in professor's areas. Many times students find it troublesome to compile a list of needed books only to discover that nearly all of them are not among the few books in English found on the fourth floor. Perhaps if there were some way to note on the catalog card the location of the books, the students could be saved some aggravation and the staff would not have to duplicate the student's efforts to search the various catalogs and closed areas for the books.

As the library has many good, current encyclopedias and reference books, I found the lack of a current almanac very surprising. The most current almanac available on the fourth floor is a 1976 edition of The U. S. Fact Book. There are a number of good almanacs published yearly at a very nominal price (¥1100-1600). One other resource lacking is a reasonably current major U. S. newspaper. Current U. S. national news is important not only for exchange students, but of interest to Japanese students as well. Presently, the library subscribes to New York Times, but it arrives by sea mail six weeks or so after publication. Even one week or so late (via air mail) would be appreciated, I am sure. These last two items almanac and newspaper may seem minor, but as most all exchange students are also involved in conversational English classes, the availability of such material would enable them to speak more accurately and timely on items of importance.

In conclusion, I realize that the library is, after all, on a Japanese university campus and is, therefore, a Japanese library. As such, it is not exclusively for us as exchange students, but primarily for the Japanese students. However, as exchange students we are, at least for one year, Seinan Gakuin University students. For that year we endeavor to pursue our education as diligently as we are able. The fine library at Seinan should be and can be a great contributor to the education we receive and take with us for the rest of our lives. On behalf of the International Division exchange students, I commend Seinan University on the overall quality of their library, and most importantly, on the quality and helpfulness of the library staff.

(筆者は、米国ウィリアム・ジュエル大学からの留学生で本年5月まで在籍)



外国図書館シリーズ
— アメリカ —

スタンフォード大学

Stanford University

Stanford, California 94305

文学部教授 古川 暢 朗

スタンフォード大学はサンフランシスコの南、480キロのパルアルト市にある。太平洋沿岸のサンタクルーズ山脈の麓まで広がる8,200エーカー(パークレイ加大、UCLA、サンタバーバラ加大、サンディエゴ加大、デービス加大の合計面積に相当)の土地をサンタクララ平原に所有し、デービス加大敷地面積を除いたカリフォルニア大学4校の総面積に相当する5,200エーカーの土地が大学施設、研究所、寮などのために使用されている。学生数は約12,870人で大学生と大学院生との比率は48:52%である。1885年に16才で急死した一人息子の死を記念して米国大陸横断鉄道建設者の一人、リーランド・スタンフォード加州知事によって創立された私立大学である。東部の伝統的教育を退け、実践的教育を目標にかかげ、7学部(school)に70の専門分野を持ち、研究所も多数持っている。

U.S. News & World Reportの優秀大学ベスト・ファイブによれば、大学部 スタンフォード大学、ハーバード大学、エール大学、プリンストン大学、加大の順。大学院部 パークレイ加大、スタンフォード大学、ハーバード大学、エール大学、MITの順と発表している。

図書館はセシル・H・グリーン図書館を中心に40の独立した図書館が校庭に散在している。蔵書総冊数は470万冊である。ちなみに、最大図書館はハーバード大学にあり、パークレイ加大は第2位で

610万冊の蔵書を持っている。幸いにもパークレイ加大でも研究しているが、研究の場所を与えられているスタンフォード大学のHoover Instituteの東亜部図書館を紹介することにする。

世界の戦争、革命、平和の研究の為1919年に設立された。約30万冊の蔵書のうち、65%が中国語文献で、残りの35%が日本語文献である。日本語文献は1945年に神田に本部を置いたスタンフォード大同窓生たちによって、雑誌、新聞、公文書を含む5,000余冊が古本屋街で買い集められ、これが貴重な貢献をしている。中国語文献では、国民党軍の占領前に雲南で買い集められた中国共産党関係文献が研究者には貴重

がられている。

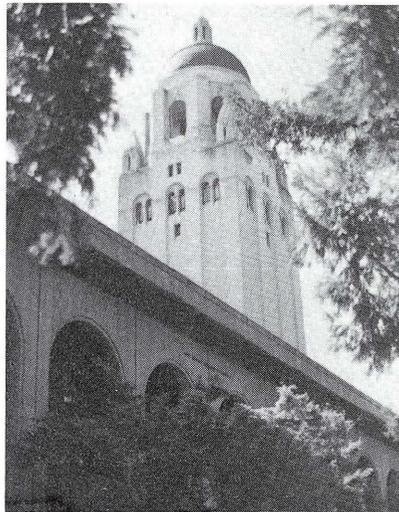
蔵書の内訳は、政治、法律、経済、財政、社会、統計、教育、防衛関係40%、歴史、地理関係25%、言語及び文学関係17%、農業を含む科学関係10%、その他8%となっている。近衛公文書、左翼運動及び関係者調査書類(1920年代、1930-1940年他)

の蔵書は特に有名である。

スタンフォード大学の図書館蔵書の大半の内カバーに色々の図案を印刷したレッテルが貼られている。その図案の中には写真なども使われていて寄贈者の名前が記入されている。女子卒業生第一号を記念する団体の寄贈本が特に印象的である。

(英語・日本語)

(筆者は、昨年8月から本年7月まで米国スタンフォード大学で在外研究中)



スタンフォード大学
East Asian Collection Library
Hoover Institute
Stanford University

第15回国連寄託図書館会議に参加して

小 嶋 哲

昨年の11月9・10日の両日にかけて東京大学で開かれた第15回国連寄託図書館会議に参加しました。この会議は、毎年1回各国連寄託図書館の担当者が集まり、一年間の各館の活動状況報告や研究発表等を通して、担当者の研修及び資質向上を図るものです。今回は特に東京で開催されたという事もあって、寄託図書館以外に近郊の外務省ほか5館の国際機関資料センターが出席された。この事に加えて“日本における国際機関資料センター”の研究発表を聞いて、自館が国際機関資料センターの一翼を担っている事を再確認すると共に、認識不足を痛感しました。つまり、現在のような情報化社会の中で東京があらゆる情報の中心地という事もあって、東京近郊のセンターは、最新か

つ正確な情報を迅速に知りたい利用者のニーズに答える使命感を持っていると同時に、情報化社会の国際的側面を授かるセンターとしての認識を保持しているように感じられました。

現在、九州経済の国際化は急速に進んでおり、また地理的にみても九州は韓国・中国・東南アジアに近く、国際化のポテンシャルを十分備えているだけに、今後国際情勢を速報的に伝える機関が重要視されるでしょう。九州ではこのような情報を伝える国際機関資料センターは数少ない。この数少ない国際機関資料センターの一つとして、認識を新たにして、資料の整理・レファレンスサービス等をやる必要があると痛感しました。

(情報サービス課・国連係)

昭和58年度大学図書館職員講習会に参加して

板 谷 茂 代

昨年の秋、大学図書館活動を促進するため、大学図書館の職員に図書館業務の最新の知識及び、専門的技術を習得させ、その資質の向上を図るといった目的の文部省主催の講習会に参加した。

学術情報センターシステム、学術雑誌総合目録データベース、情報検索システム、書誌情報の国際的標準化とMARCの利用etc.、最近になって耳にする言葉に図書館の過渡期が感じられる。今や機械化、ネットワーク時代の到来である。今からは1館だけで研究者に情報を提供していくには、不完全な状況であり、図書館相互の協力態勢が必然的になってくる。相互貸借、文献複写、貸し出

し、閲覧、目録の作成時における共同作業、資料の分担収集といった問題、それらを可能にするには、参加館が書誌情報を全てデータベースの形で入れて、検索が容易であるといった条件を備えたコンピュータによるオンラインシステムを採用していなければならない。

「我が西南も立ちおくれではならじ!!」という気がしないでもないが、目的から外れてしまつて「機械化のための」という名目に振り回されてしまう恐れも考えられないことはない。しかし大学たるものが情報処理が必要な時にディスプレイが苦手では済まされないのであって、図書館として

は情報検索システムの確立を迫られつつある。データを捜して読むことのみだった従来のシステムから、データを統合化、一体化したデータベースに、利用者がデータの追加や更新を行ない得ようになってきている現在、頭の中の切り替えを迫られながら、今現在を処理していかねばならない二重構造の中で、「ニューメディア」という言葉が目の前を飛び交っている。「アア」と溜息が

出そうで、決められてない路線を空振りせずに、脱線しないように走ってゆくのは並大抵のことではなさそうである。

来年の講習会はもう、一步も二歩も進んだ内容になっていることだろう。国際情報化時代の渦の中で自分を見失わないように、西南も現在立たされている位置を見極めながら進まねばならない時期にきているのではないだろうか。

(整理課・和漢書整理係)

ベストセラーズコーナー——この半年——

倉 光 恵

ベストセラーズ・コーナーが設置されてから、もう半年余りすぎた。大学図書館といえばとかく堅いという印象で学術専門書や資料が書架に並んでいるのを想像しがちである。実際には娯楽雑誌や週刊紙なども相当数揃っているのだが、研究者はいざ知らず、学生にしてみれば気軽に……などとは未だしの感であろう。これは他の大学も同様なようで、学生の活字ばなれの防衛にいろいろ努力がなされている。そもそもいかに価値ある図書・資料をいかに多く揃えようと、利用されねば単なる収蔵庫にすぎない。利用を増やし図書・資料をより価値あらしめるための利用者、とくに学生の誘引策の一つとしてベストセラーズ・コーナーが設けられたのである。以前は実際に新聞等に広告されベストセラーとなった小説、エッセイ、その他を利用をしに訪れた学生が、図書館に存在しないことを知り不思議そうな顔をして帰っていくのを何度となくみている。ときには“頭を休めるための読書”にくることもあるのである。ベストセラーズ・コーナーの設置については、一部には反対の意見もあったが、かねて各学部教授会より選出の図書館委員会からの要望でもあったのでスムーズに実現した。そこで、その年毎のベストセ

ラー10を過去15年に溯り、選書にあたってはエログロ等、特に眉をひそめたくなるようなものを除きできるだけ広範囲に選び、場所も最も目立つ2階閲覧室入口にコーナーを設置し、逐次受け入れ、並べているのが現在約400冊ほどになっている。

利用面では予想通り利用頻度が極めて高く、また他の専門書を利用するあい間の気分転換の為に、利用しているのをよくみかける。貸し出しも特に頻繁で、他の図書に比べ数倍の利用率である。利用ベストテンとでもいうべきものをあげれば、

気くばりのすすめ(鈴木健二) プロ野球を10倍(20倍)楽しく見る方法(江本孟紀) 窓ぎわのトットちゃん(黒柳徹子) こんな男を(女を)選びなさい(円山雅也) 恋は二度目からおもしろい(落合恵子) ぐうたら人間学(遠藤周作) 聡明な女の人間関係12章(鈴木健二) 七つの恋の物語(渡辺淳一) 雨が好き(高橋洋子) 新・逆転の発想(糸川英夫) などがある。

いずれにせよこのために学生の入館者数も着実に伸びており、私達館員は学生のこの潤滑油的ゆとりのための利用を微笑ましく見守っているのである。

(情報サービス課・係長)